

～～～竹内緑さんの働きを訪問して 湯本 沙友里～～～

2017年9月14日～27日訪問

緑さんの活動は、2016年にパンフレット制作に携わらせていただくことで知りました。

2013年から約1年弱、エチオピアとケニアで子どもや女性たちの貧困問題解決にむけての取組みを行う現地NGOでボランティア活動を経験した私は、今後、主がどのような働きに導かれているのかを祈りより深く知っていくために、日本の一般企業で働き学びながら、「人が真の自立をしていくために大切なことは何か」について、考えさせられていました。

そんな中で、緑さんが活動される上で大切にされている「活動の4つの柱」が深く心に留まりました。「精神的、社会的、身体的、霊的」、人の健全な回復には、そのどれが欠けてしまっても不十分であること、人それぞれが抱える問題や状況を理解して相手の声に耳を傾けながらそれぞれのペースで、必要な援助を行っていくことが大切であるという気づきを与えられました。



左から湯本沙友里さん、アルフォンシン、縫製を学んでいる女性、アルフォンシンの縫製の先生、カウンセラー、竹内。アルフォンシンは、先生の経営する店で縫製を学び、洋服を作成し販売している。その店舗の前で撮影。

その後2017年に再びエチオピアへ来た私は、兼ねてから関心のあったルワンダへ、ビザの更新を利用して訪れることにしました。

緑さんが関わっておられる若い女性たちが負った、想像を絶する苦しみの人生

は、大虐殺の痛みを抱えた人々からの、負の連鎖の結果でもあることを知りました。直接的な虐殺の被害を受けていなかったとしても、苦しみの経験がもたらした症状や状況は、どこかで断ち切られない限り、親から子へ、または前の世代から次の世代へと引き継がれてしまいます。

トラウマは時間と共に自然に消滅していくものではなく、放っておくと症状は悪化するばかりか、時間をかけてその人自身と人生を蝕んでゆくというのです。周囲の人々には理解されずに孤立し、差別の対象とされ、時には周囲から攻撃され、自らをコントロールできずに苦しみ、身近な家族を不本意ながら攻撃し、一番大切な人たちを傷つけてしまい、傷つけられた子たちもトラウマを負い、将来同じことを繰り返してしまう…。

そんな、どうしようもない状況にもがき続けていることを知りました。自らが抱える問題は一向に解決しないどころか、そこへ向けて進みだす力も湧かず、本人には更なる苦しみがのしかかると言います。本人の責任から始まったものでなかったとしても（もちろん全ての人に罪があるということが前提ですが）、負の実を刈り取り続けなければならないのです。

それを断ち切ることができるのは誰でしょうか。本人が立ち上がるしかありません。しかし、一人では乗り越えられない大きな問題が目の前に立ちはだかっているため、どうにかしたいと思っても、原因も方法も分からず何も見えてこないのです。それはまるで、深い暗闇の中にいるようで、今の居場所もどこへ向かえばいいのか分からない状況だと思います。そんな女性たちが必要としているのは助けてくれる誰かの存在です。困難な状況にある方々へ「希望」の光を差し伸べて、「あなたと共に歩みます」と優しく語り掛け、道を示し続けること、それが緑さんの働きだと思いました。それはイエス様が私たちに下さったことを、知らない人々に見えるように実践する行為だと思いました。

「その人の抱える問題を理解し、時に介入し、その人生を共に歩み、見捨てない」という、寄り添う側の生き方を、緑さんやスタッフの仕える姿から教えられました。

トラウマを負った人々の症状の一つに、「希望が持てない、夢を描けない、将来の計画を立てることができない」というものがあることを知りました。また、正しい解決方法が分からずに、間違っただ道を進んでしまうこともあるといいます。

また、トラウマを患ってしまう人は女性が圧倒的に多いという話も聞きました。女性は豊かな感性が与えられていると同時に傷つきやすく、弱い存在です。その女性を理解して寄り添い続けることができるのも、女性だからこその働きだと思えますし、緑さんが持つ深い優しさと忍耐力、培ってきた経験により養われた知識、そして覚悟と責任感、その背後にあるイエス様が注ぎ続けてくださっている豊かな愛とともに、傷ついた女性とその家族を包み込み、安心感を与えているように感じました。

受益者の女性たちの言葉が、私の心に深く刻まれています。「これまで幸せを感

じたことも、自分や子どもの未来など考えたこともなかったが、今はとても幸せを感じる。子どもたちの将来についても考えられるようになった」「過去の私は人間ではなかった。今ようやく人間になれた」「近所で誰も自分を助けてくれる人がいなかった、自死も考えた。なのに遠い日本から緑さんがこんな田舎まで助けに来てくれた。それは神様だけがなせる業だ」

その一つ一つの証が、神様のストーリーとして過去と現在、そして未来へと希望を紡いでいくのだと思うと、胸が熱くなる思いです。

受益者の女性たちは、差し伸べられた手を信頼し、立ち上がる決意をして、新たな歩みを踏み出していきます。それはとても勇気がいることだと思いますし、自分の過去と痛み、現在抱えている問題に向き合うというのは、簡単な事ではないはずです。沢山の失敗も経験することでしょう。しかし諦めずに歩み続けようとするその姿から、私自身が勇気づけられ、励まされたことは言うまでもありません。そして回復した女性たちは自ら、「自活していけるようになったので、経済的な支援はもう終わって大丈夫」という決意を話してくれると聞いたのは驚きでした。人が社会で奮闘し努力ができるのは、決して当たり前には備わっている力ではなく、家族や身近な人に愛されてきた経験や、支えてくれている誰かがいるという安心感を得て養われたからこそ、築き上げられた土台なのだ、ある本で読んだことがあります。神の家族の健全な姿も、そこにあると思いました。

彼女たちはよく、優しくて穏やかな素敵な笑顔を見せてくれました。痛みを完全に拭いきることができなかったとしても、逃げずに歩み続けてきたことで培われたその特別な笑顔は、次の世代の光となっていくことと確信しています。

できるだけ多くの人に関わろうとするのではなく、目の前の一人にじっくりと関わって見守り続けるという、一見最も小さく思えるような働きが持つ、尊さと豊かさや大きさを知りました。

また、緑さんには個人的なこととして、私自身の今後のアフリカでの働きや信仰面について、ご自身の経験や学び、主に語られてきたこと等を分かち合って頂きながら、親身になって相談にのって下さり、深い学びの時となり感謝しています。

そして、ルワンダでの生活スタイルも、丁寧かつシンプルで無駄がなく、それでいて美しく、見習いたいと惚れ惚れするほどでした。忙しくて簡単にモノを手に入れられる現代の日本では忘れられがちになっている、本当の生活の豊かさを見せて頂いたような気がします。生活や食事を整えることが生きることの土台づくりであり、主が託して下さっている「自分を管理」することの基本であり、善い働きへと繋がっていくのだと、生活からも主を慕われる姿に感銘を受けました。

全てにおいて、祈り、働き、自分自身がつくり変えられていく、という過程を求めつつ歩みながら、いかに生きるべきかと自問し続け、イエス様の後を追

従っていらっしゃる緑さんの姿と働き、そして豊かな交わりの時から、主にある沢山の大切な事を教えていただきました。心より感謝いたします。



左よりカウンセラー、アドリン、湯本沙友里さん。アドリンの自宅近くで撮影。

\*\*\*\*\*

### **湯本 沙友里 さん**

キリスト教 NGO「声なき者の友」の輪（FVI） ウェブデザイナー (<http://karashi.net/>)  
エチオピアで貧困問題の解決に向けた取り組みの一つとして「働く場所」づくりに関心を持ち、  
現地に滞在しながら模索しています。

FVIのウェブサイトにて「さゆりのアフリカ滞在記」を公開中しています。

(<http://karashi.net/ethiopia/>)

日本同盟基督教団 シティリジョイスチャーチ 教会員